

語り 平野利子さん

にんにがしー

聞き書き 平尾一彦

稲荷坂で三代続くお米屋さん

こんにちは。平野としこです。「利子（りし）」と書いて「利子（としこ）」です。よろしくお願ひします。

あらまあ、本にするって？ わたし、本になるような話はないですよ。ふふふ。
わたしの歳？

昭和十年十一月十七日生まれ、八十八歳ですよ。若く見えるですって？ ははは。

子どもは二人。息子と娘がいます。息子に女の子が二人、娘に女の子が三人いますので、孫は女の子ばかり五人いるんです。

昨年、子どもたちが米寿のお祝いを内緒でやってくれたんですよ。

「おばあちゃん、今日出かけるからね」って急に言ってくるので、どこへ行くかと思いつなが普通の格好で行ったら、家族みんな、わたしの米寿のお祝いをしてくれましたね。

食事をして、花束とか、鶴とか亀の手作りのお祝い品をもらってね。びっくりしましたよ。とつてもうれしかったですよ。うふふふ。

そのときの写真がスマホに入っているから、あとでお見せしますよ。このスマホ入れは、わたしが自分で作ったんですよ。

娘は北里大学を出て、薬剤師になりました。そして、お医者さんと結婚し、横浜で産婦人科の病院を経営しているんだけど、忙しくてなかなか会えないのが残念です。

今は息子の光治（みつはる）と一緒に暮らしています。

住まいは、祐天寺と中目黒の中間、稲荷坂、ちょうど東急東横線の線路脇を歩いてくると家に出てくるんです。ちよつと祐天寺に近いかな。稲荷坂の途中の住宅街にあるお米屋さん「平野屋米店」なんです。

ウチの近所には全然お店がないんですよ。坂の入口にタバコ屋さんがあるだけ。

昔は、靴屋や床屋さんがあったけど、店を閉めちゃって、今はウチ一軒ですよ。

初代のおじいちゃん、主人の父は元々は中目黒商店街に店を構えていたんですが、そこから今の坂の途中に店を構えたんです。

わたしが生まれる二年前の昭和八年に創業し、今年で九十一年のお米屋さんです。初代が主人の父「光蔵（みつぞう）」、主人「光雄（みつお）」が二代目、息子「光治」が三代目です。三人共、名前に「光」の文字が入っていて、光り輝いていますね。

ウチはちよつと変わったお米屋さんなんです。

全国各地から一般的なものから珍しい品種まで約二十から二十五種のいろんなお米を取り揃えて、袋に玄米のまま置いてあるんです。お客さんが買う都度精米して販売しているん

です。

だから美味しんですよ。

今は七月ですが、日本一早く収穫される沖縄石垣島産の新米「ちゅらひかり」「ひとめぼれ」が出ていますよ。

わたしが好きなのは富山のお米です。他の人は物足りないって言いますが、あつさりしていて好きですよ。

息子は「五つ星お米マイスター」の資格を持ち、お米の勉強を常に行っていますね。新しい品物のお米が届くと、まず自分たちで食べて、味が濃いつか、柔らかいつか、堅いつか、さっぱりしているとか全部書いておいて、お客さんの好みに合わせて販売できるようにしています。

店頭のお米には、もちもち度、柔らかさ、甘みなど、お米の特徴を独自の表にして、お客さんにも分かるようにしてあるんですよ。

わたしは、今は手を出さないの。ご隠居さんです。

ただ、お店には出ていますよ。でも、わたしが店に出ると、店先でお客さんと何時間でも話し込んでしゃうんです。だから、忙しいときには店には出ないんです。わたし目当てに来る古くからの馴染みのお客さんもいますよ。

主人との出会いと突然の別れ

わたしの生まれは神奈川県平塚なんですよね。平野家のおじいちゃんとお父さんとお母さんが仲が良かったの。平野家は古くて、お相撲さんも輩出しているんです。でも、結局、平野家の本家はもうなくなっちゃっています。

でも、そのお相撲さんは巡業先の九州で、ヤクザに刺されちゃったんです。のちに主人となる光雄は平塚に疎開で来てて、わたしが近所だったんで、子ども同士で会ったりしていたんです。

わたしは山登りが好きで一人で登ってました。あるとき、確か二十二歳のときでした。安達太良山登山の帰り道に雨にあっけしき、雨宿りをしていたら、主人がくしゃくしゃに

なった登山靴を流しで洗っていたんです。何の気なしに話をし始めたら「あら、ボクはその平野家だ」ってことになって、それが縁で、平野家へわたしが嫁に行くことになったんです。不思議なご縁で、結婚しました。

仲人はおじいちゃんの兄にあたる人がやりました。装飾が豪華で「百段階段」でも有名な目黒雅叙園で結婚式を挙げました。ははは。

鬢が重たくてずつと下を向いていたんだけど、鏡に映る自分の姿がどうしても見たくなくてね、ひよいと上を向いたら「お嫁さん、頭を動かさないで！」と注意されたのをいまだに覚えています。ふふふふ。

新婚旅行にも行きましたけど、お店をやっているから、箱根の宿で一晩泊まって帰ってきました。新婚旅行が一泊だけだったから、その後、夏休みに主人は北海道に連れて行ってくれました。主人はやさしいだけでなく、無類の子ども好きでした。

自分の子どもだけでなく、買い物途中のお客さんのお子さんを預かっては、クルマに乗せてあげたりして、なかなか帰ってこないこともありましたね。

ところが、昭和五十八年、主人は五十歳のときに亡くなっちゃったんです。急な出来事でした。

息子がちょうど大学を卒業するときだったので、ウチで仕込むよりも、他所の空気を吸わせてからウチに入れようという予定だったんです。だから息子には全然店のことを教えてなかったんです。

そんなバタバタのときに、息子に、聞いたんです。

「どうする？」と。

すると「跡を取る」って、言ってくれたんです。うれしかったですね。

息子は就職先も決まっていたんですが、就職せずにそのまま後を継いでくれたんです。

主人は、高熱でふうふう言っていました。わたしが病床の傍について、三十分おきに店に電話しては、配達依頼の電話を受けた息子に、主人に尋ねては「〇〇さんなら、どの米を何キロ配達しなさい」と伝えたんです。息子は、お客さん一軒一軒、何人家族で、どんなお米をどんな頻度で注文するのか、それを全部帳面に書いて覚え、配達してました。

幸いにもお客さんはみんな良い方ばかりでしたね。

お米の仕入れについても覚えてもらいました。

わたしも一から息子を仕込んだんです。かなしいというより、この先どうしよう、息子をどう継がせようという気持ちが強かったですね。

当時、六十糎の米俵をわたしは担げたけど、息子は担げなかつたですよ。

下の倉庫から米俵一俵を担いできて、精米の機械の中に入れました。

米俵を四段まで積んだものです。

よくやったなあと思いますよ。

今では逆で、わたしは持てませんけど。ふふふつ。

その俵がなくなり、今では米袋は紙袋になり、重さも半分の三十糎になっていますね。

息子は酒も飲まず、麻雀もせず、タバコも吸わず、ホントに真面目。

わたしも、おかげさまで幸せだね。どういうわけか、ちゃんとお嫁さんも来てくれて。

下町出身のとっても良いお嫁さんですよ。

息子には娘が二人います。一人は結婚して、保育園の先生をやっている、もう一人は美大を出て、まだ結婚してなくて、米屋の横つちよで「トウンタウン (tuan tuan)」というお店をやっています。ベトナムの飼料袋をリメイクし、手作りの手提げバッグや雑貨を販売しているんです。「トウンタウン」って、ベトナムの男の子でよくある名前で、親しみを込めて店名にしたようです。

そして、実家の米屋も手伝ってくれていて、米屋のマークやらデザインも美大出の孫娘が考案してくれました。

息子はね。未熟児だったんです。わたしが身体を壊して、八ヶ月で生まれたんです。わたしも二十日間入院しましたが、息子も日赤病院のケースの中に四十日も入っていたんです。母乳を家で搾っては、牛乳瓶に入れて氷で冷やしながら病院まで届けたものです。

母乳を飲んだおかげか、病気一つせずに、ぐんぐん丈夫に育ち、小学校の四年のときには、主人も以前入っていたボーイスカウトにも入れましたよ。中学二年生のときには、北海道で開催されたジャンボリーにも参加し、行って良かったと言っていました。今の上皇さま、当時

の皇太子さまから、直接言葉をかけられたようです。

男の子が欲しいと言っていたおじいちゃんは、息子の誕生をとっても喜んで、可愛がっていましたよ。

「悪かったね」の一言で救われたわたし

でもね。おじいちゃんはわたしをあまり好まなかったんです。いじめられましたね。

お酒が好きで、午後三時になると食卓で、わたしの顔を見ながら「お酒を持って来い！」と口に出さず、箸で食卓の天板をトントントンと叩きながら「酒持って来い。酒持って来い」と盛んに合図をしましたね。傍に座っていたおばあちゃんは、お嬢さん育ちで、何もやらなかったね。

わたしは、その叩く音を聴くと、日本酒をちよつと温めて持って行きました。

つまみはお新香でも、ホウレン草でも何でもよかったです。大酒飲みではなく、ちびりちびりと飲んでいたおじいちゃんでした。

わたしが嫁いでくるまでは、外で飲んで、べろんべろんに酔っぱらって、リヤカーに乗せられて帰ってくることもあったようですよ。わたしが嫁いでは家は家で飲むようになってたそうです。

おばあちゃんも、わたしをいじめているおじいちゃんに「そんなことをしちゃダメだよ」と言うわけでもなく、一緒になってわたしをいじっていました。

おばあちゃんも自分の娘の世話になろうとして、出て行ったこともありすが、三日もすれば戻ってきていましたね。新品の下着や靴下を持たせても、戻ってきたときは、どういうわけかボロボロの物を身に着けていました。

主人を亡くして、息子を仕込むのにたいへんときだつたけど、がまんがまんを重ねておばあちゃんの面倒を見ましたよ。そのときは苦労しました。

そんなおばあちゃんも亡くなる時には「おまえはいろいろとやってくれた。悪かったね」とわたしに謝ってくれたんです。

その言葉に、わたしは救われましたよ。おばあちゃんが「悪かった」と言ってくれなかつ

たら、一生恨んでいたかもしれないね。

おじいちゃんが倒れて頭を打ったときには、わたしは氷枕を持って行ったんだけど「オレは倒れたんじゃない。転んだんだ」と言い張りましたよ。翌朝には、おじいちゃんは息を引き取っていました。脳溢血でした。それ以来、おばあちゃんは「利子。利子」と言っ、わたしを頼ってくるようになってきました。

でも、主人は、両親とわたしの間に入って、わたしを守ってくれてよかったです。本当に良い人でしたよ。

おじいちゃんもおばあちゃんも主人も今は祐天寺に眠っています。

息子はそんな主人に似て、やさしいですよ。

お姑さんは三人もいましたよ。今考えるとよく嫁いできたと思います。

当時、店は若い衆二人と主人と主人の弟の四人でやっていました。

若い衆は住み込みでしたから、わたしは毎食たくさんのご飯を作りましたね。二升炊きの大きな釜が台所の端っこにありました。

飼いだ猫でなく、他所の猫がお釜におしっこをひっかけて、炊いたら、臭くなったのを覚えていますよ。ふふふふ。

しかも、同じ鰻でも、おじいちゃんたちは煮たのが良いって言うし、若い衆は焼いたのが良いとか揚げたのが良いと言うから、大変でしたよ。

みんなに美味しく食べてもらいたくて、息子をおんぶしながら、一生懸命働きました。それをよく乗り越えてきたと思いますよ。

若い衆は、乾いた洗濯物を畳んでくれたり、わたしをよく手伝ってくれました。

お米の配達は自転車だけでなく、オートバイでもやっていました。

わたしも配達をやっていましたよ。

実家は平塚の和菓子屋さん

この辺で、今度はわたしの実家について話しますね。

平塚の四之宮のわたしの実家は、明治四十一年創業の「松品堂（しょうひんどう）」とい

う老舗の和菓子屋さんでした。

松品堂の名物は「せきとう」でした。水飴を煮込んで飴にしたものです。ハサミで切って、そのままだと熱いので、ペシヤンとしちゃうんで、冷めるまで網の上でコロコロ転がして、仕上げるんです。面白いように、売れましたよ。

家の裏には北向観音がありましたね。言い伝えでは、

お竹さんの古里、北向観音と言つてね。その昔、四之宮の二見家で奉公していたお竹さんは朝早く起き、夜は仕事を済ませてから近くの観音様に日参していたんです。家族と離れて奉公に来ているお竹さんにはこの観音様はまさに心の古里だったのです。お竹さんは後に嫁ぐことになり、観音様にお列れの参詣に出向いたときに観音様は列れを惜しまれ、お竹さんが嫁ぐ北の方向に向きを変えたそうです。どの方向だったかは分かりませんが、元の位置に観音様を戻しても、どうしても、また北を向いたそうです。

そのお竹さんに因んだ和菓子「お竹さん」「北向観音」も作っていました。

ちっちゃいときから、お店のお手伝いをしていました。味噌煎餅も有名で、わたしも焼い

ていましたよ。

お店の前にバス停があつて、朝六時前には甘党のお客さんが二人来てました。毎朝、朝ごはん替わりに饅頭を食べてましたよ。二人のうち一人は帰りも立ち寄つて饅頭を一つ食べていましたね。

お店の前のバス停には、赤い旗を立てておくんです。するとお客さんが待っていないなくても、バスが停まってくれるんで、お客さんは店を飛び出して、六時発のバスに乗車して、勤めに çıkかけていきましたよ。田舎でしたからね。へへへ。

そのため、朝四時に起きて、お店を開けて、掃除して、お客さんがお茶を飲むようにお湯を沸かしたりしてました。

だから今でも四時になるとパッと目が覚めていますよ。

暮れには、お客さんが箆に入れて持つてきたもち米をセイロにのせるんです。そこから先は、わたしたちの出番です。セイロで蒸したもち米をお客さんが機械でつくのを手伝いましたよ。お父さんの合図で、わたしはつきあがったお餅を取り出し、蒸したもち米を機械に入

れるんですよ。空つきにならないように、慎重にタイミングを合わせたものです。

お客さんはつきたてのお餅を持ち帰るんですが、そのままだと柔らかいので、北向観音のそばで、お餅を干していましたよ。

お客さんにとつても、手間はかからないし、わたしたちもお餅をつくだけで、手間賃も入り、繁盛したもんです。年末の二十五日からつき始めて、三十日までやりました。

今の米屋でも、お餅を販売しています。早稲田の学生のバイトさんを六人ほど雇ってやっていましたが、今でもその人たちが二月と暮れの年二回、今年も行きますと申し出てくれて助かっています。バイトさんを探さなくてもよいので、ありがたいことです。

バイト代も安いので、出来上がったお餅をあげたり、靴下やジュースを買って差し上げています。

長い人はもう十年も来てくれますが、何が良くて、今でも来てくれるのか分かりません。もう要領が分かっているから手際もいいんです。

食事の準備がたいへんです。ケチケチしないで、お肉もたくさん用意します。

二月は寒餅と言って、お餅に豆やゴマや黒砂糖を入れたり、この前は唐辛子を入れました。チューブ入りの唐辛子を入れたら、お餅が固まらず、溶けちゃって、つるんつるんと飲むような感じが良いというお客さんもいました。

話が脱線したので、実家の話に戻しますね。

平塚は今では七夕祭りで有名ですが、昔はなかったです。それでも商店街は、日産やパイロットの工場もあって、賑やかでしたね。今は、工場もなくなり、みなさんクルマで厚木まで買い物に出かけるから、平塚は廃れてしまいました。

旧姓は一杉（ひとすぎ）です。珍しい苗字だろうけど、伊豆の大島に行くと多い苗字ですよ。お父さんは「藤吉（とうきち）」、母は「かく」です。

わたしの上には兄が二人いたんですが、和菓子屋はイヤだと言って、家を出ちゃったんですよ。それで、弟が店を継いだんですが、その弟も亡くなって、店はもうやっていないんです。実家はそのまま、店の看板も残っていますよ。

足が壊死する病気に母が罹り、切断したんですが、あるとき、弟は大工仕事をやっていて、

電気ノコギリで足をケガしてしまったこともありましたね。

にんにがしいー

戦争中はモノが入らないので、一年か二年お店を閉めていましたね。

それでも、和菓子屋だったので、手持ちのお砂糖を持つては、母とリュックを背負って、農家へ買い出しに、平塚の大島まで行きました。お砂糖一詰をお米一升と交換したものです。農家の人からはお砂糖じゃなくて、サツカリンじゃないかと疑われたりされました。

何年か経って、その買い出しに出かけた場所を通ると、田んぼの中に竹藪が残っていて「ああ、ここだあ」と思わず声を出してしまいました。

母が「おまえ、ここに座っているよ」って、わたしを残して農家に交換にいったまま、日が暮れて、暗くなっても、母は戻ってこないの、わたしは捨てられたのかなと思って、心細くなった場所なんです。

母と買い出しに行くときは、学校を休んで行きました。

学校の横を通ると、教室の窓から「にんがしいー」と聞こえてくるんです。

「にんがしいー。にさんがろくうー」って、九九の練習をしている声がいまだに頭から離れないですね。そのくらい学校に行きたかったんですよ。つらかったねえ。

食べるものがない時代でしたから、仕方なかったんです。

でも、家族が多かったから、交換してきたお米では十分でなく、お粥にして量を増やしたり、配給のさつま芋を入れたりしていましたね。農家が捨てた芋のつるも持ち帰り、すいとんに入れたものです。

そういえば、母が妊婦だったときに、町会から配給された北海道の雪印バターを、母がいないときに、棚の上から下ろして、そのまま食べました。帰宅した母に怒りましたが、あの味は今だに忘れません。

戦争の思い出

暑い中、また来てくださったんですね。今日は七十九回目の終戦記念日ですよ。

戦争の思い出ですか？

平塚は空襲を受けました。幸いにも、実家は焼けずにすみましたが、平塚には海軍工廠と陸軍工廠があつたので、アメリカ軍に狙われたのかもしれないね。

終戦の日は、今日のように暑い日でしたね。外でわたしは子守りをしていたので、ラジオの玉音放送は聴いていません。あとから日本が負けたと知りました。

戦争中の記憶では、ケガをした兵隊さんが小学校の三階に運び込まれ、頭の手拭いを交換したり、夢中で世話をしたのを覚えています。まだ小学三年生のころでした。

高学年の生徒は学校の周りの防空壕堀りに駆り出されていました。

わたしの家には、外にあつた薪風呂の下にコンクリートで立派な防空壕がありました。

空襲警報のサイレンが鳴ると、消防署の人が半鐘を鳴らすんです。その半鐘の叩き方がチヤンチヤンチャーッと早くなつてくると、敵機がもうそこまで来ているって分かるんですよ。慌てて防空壕に逃げ込むんです。

日本軍なのかアメリカ軍なのか分かりませんが、撃つてきた爆弾がドーンと落ちると地

面が揺れるんです。怖かったですよ……。

そうそう、戦争が終わって学校へ行くんですが、校舎は焼けてしまっていたので、防空壕の跡地で勉強をしたのを覚えていますよ。空襲で亡くなったお友だちもいました。

それとアメリカ軍の飛行機がビラや万年筆を落とすんです。万年筆は爆弾になっていて、拾っていいじっていると爆発して、お友だちが一人亡くなっています。

わたしも空襲のときには逃げました。平塚の海岸をアメリカ兵が上陸してくると言われ、母がリヤカーに子どもを乗っけて厚木の方まで逃げましたね。

わたしは男五人、女四人の九人きょうだいの長女でしたから、いつも母はわたしを頼りにしていました。

一回り以上も年の離れた双子の妹たちは、今でも健在で、平塚に住んでいます。わたしは妹の一人をおんぶし、もう一人を乳母車に乗せて子守りをしたり、おむつを替えたり、母親のように世話をしていました。友だちと遊んだりできませんでした。華道の池坊の先生をやっている島津芳子（よしこ）と今井恭子（きょうこ）は今も元気で、わたしによくしてくれ

ますよ。時々、家まで来てくれています。

二人とも、主人が丹沢山に連れて行つて、登山を仕込んだんです。お昼に食べた飯盒で炊いたご飯と味噌汁が美味しくつて、山好きになったんです。

おこげの味

母は小柄で、頑固者でしたね。二升炊きの大きなお釜でご飯を炊くんですが、母はわたしに「お釜を洗つてきなさい」と言つては、お釜の底にわざとご飯を残しておいてくれたんです。釜底にはおこげのご飯がこびりついていて、お釜を洗いながら、ご飯を食べたもんです。

おじいちゃんにもバレないようにして、母なりのわたしへのやさしい思いだったんです。母の手には、いつもあかぎれが出来ていて、夜になると、ねとねとした黒い薬を指先に塗り、そこに火箸をあてるとジュツジュツと音がしていました。母はアチチチチと言いながら、熱くなった指先をフウツと吹いて冷まして固めてから、絆創膏を貼っていましたね。

妹がその様子を作文に書いたら、入選しました。

働き者の母は、九人の子どもを育てたくらいだから強くて、年中、お父さんとやりあっていました。お茶碗が飛んできて、わたしに当たったこともありました。はははは。

そんな様子をわたしは子どもに見るのがイヤだから、外に出ていってましたね。

消防団員だったお父さんは空襲のときも、わが家はそっちのけで、すぐに家を飛び出して、空襲の最中でも松の木にかかった半鐘を叩き続けていたそうです。

きょうだいがたくさんで、双子の妹の下に弟が生まれたときには、母に「もうやめてくれ」って言いました。子ども心に手放しでは喜べなかったですよ。

一番上と一番下は二十歳も離れているから、下の子はわたしが育てたようなものです。

すぐ下の妹は、わたしがお嫁に行ったあと、居なくなってしまうって、湯河原の温泉で働いていて、わたしが迎えに行ったこともありました。仕事を世話しても長く続かなかったです。今、どこにいるのか分かりません。

お裁縫はお店番をやりながら、やっています。和裁も洋裁も学んだんです。

洋裁は平塚に今でもある洋裁専門学校に行き、師範科を出て、先生から「教室を手伝って

ください」と言われたんだけど、ウチの和菓子屋の手伝いで忙しいと断りました。

和裁は近所の二階で教えてもらいました。和菓子屋が忙しくなってくると「利子！」って、通りの向こうから呼ばれて、慌てて、店に戻ったものです。

双子の妹の着物はわたしが縫ってあげたし、浴衣なんか三時間で仕上げちゃいましたよ。今日着ている上着もおばあちゃんの着物を手直したものです。だから、自分の洋服は買ったことはいません。

わたしは母に甘えることはなかったですねえ。

お父さんはね、お饅頭を作っていたからなのか、すごく太っていました。

町で仮装行列をやったときには布袋様の役をやっていましたよ。

一番似合っていて、賞を取りましたよ。はははは。

お腹を出して歩くのを、娘として見るのはちよつと恥ずかしかったです。

お腹が空くと「お饅頭を食っていけ」と作ったばかりのお饅頭をわたしの手に乗せてくれたものです。

わたしの人生は和菓子屋で生まれ、育ち、米屋に嫁いで、食べものにご縁がある不思議な人生ですね。

山ガールになったワケ

世間が休みの日曜日は、和菓子屋は忙しいんです。だから遊ぶのは一人。それで一人で出る山登りを始めました。最初に登ったのは女学校のところに神奈川県丹沢にある大山さん、年中、暇ができると登ってました。七十代くらいまでは、一人で気楽に出かけたものです。

中腹には阿夫利（あふり）神社があつて、みんな夜登ってはご来光を拝むんです。

その阿夫利神社から少し下ったところに大山寺があり「大山のお不動さん」として親しまれ、毎月二十九日に行くとお不動さんが見られるんです。ご利益があるようですよ。一昨年登った時は四頭の鹿に出会って、近くの売店に逃げ込みましたよ。親子の鹿なんですよが、怖かったですよ。お店の人は、「たまに鹿が来るんですよ」と言いながら、店先の品物が鹿に取られないように、手慣れた様子でカバーをかけていました。

富士山にも四回登っていますよ。一番最初は息子と一緒に、きょうだいと主人と、近所のおばさんたちとも登りましたよ。夜に登って、お釜の周りをぐるっと回り、ご来光を拝みました。

下山は砂走（すなばしり）っていうのがあって面白いんですよ。下りるとき一歩で一踏くらいいざーッと滑るんです。また一歩がズーッと滑って、スリル感とスピード感を味わうことができるんです。怖いとは思いませんでしたね。

あなたはまだ一度も富士山に登ったことがないんですか。うふふつ。
今でも、山ガール、いや今は山ガールではなく、山女ですよ。

わたしは丹沢は性に合わないけど、息子は出かけていってますね。

沢には蒜がいるんです。ズボンの合間からでも入り込んで血を吸うんで、イヤなんです。安達太良山もいいですね。今はガスが出て、お釜を下に降りられないかもしれません。箱根も、二子山を通って強羅の方に出るコースもイイですね。

一人で山に行くとイヤなことを忘れちゃいますね。自然の中に行くとなんて自分はずっ

ちやい存在なんだろうと思います。

主人が亡くなって、四十八歳で後家さんになり、一人で山登りを続けてきましたが、もうこれといった山もなくなると、今度は海外に出かけるようになりました。

タイ行って、象に乗ったこともあるし、蛇も手で掴めるんです。中国とかオーストラリアにも行きました。特に中国には十回じゃきかないくらい行きましたね。

わたしは仏像を彫っていたんで、中国の庭先にある仏像に興味を持ったんです。飛行機が揺れて怖い目に遭ったりもしましたが、海外を旅行することは怖くはなかったですね。

言葉が分からなくても、結構身振り手振りで通じますよ。

木彫りの腕前はプロ級

仏像の話が出たんで言いますが、わたしは木彫りの仏像を彫っています。

小さいのから大きいので、仏様、風神雷神、不動明王だけでなく、おじいさんとおばあさんの木彫りとたくさん彫っていますよ。

高さ三十センチほどの不動明王は、本体、土台だけでなく、背中に背負っている「火焰光背（かえんこうはい）」もわたし彫ったんです。厚さ数センチの板の反りをなくしながら、数センチになるまで火焰を彫りました。

一体制作するのに何年かかるかですって？

不動明王は制作するのに、本体は三ヶ月、背中は一ヶ月ほどかかりましたよ。毎日ではなく、やるときは午前中から夕方までやります。お部屋は削った木屑だらけになります。

主人が早く亡くなつて、友だちも子育てに忙しいのでわたしに会うゆとりもないころ、川崎大師の知人の紹介で、横浜まで植草等雲先生に教わりに行くようになりました。

絵を描いて、寸法を測つて彫るのが普通ですが、植草先生のやり方は、頭と身体と足の部分と中央線を引いただけでいきなり木の塊を彫り出すんです。

彫刻刀だつて一本、二本じゃないですよ。六十本は持っています。彫り終えたら、洗つて、ワックスをかけるんです。

良く教えてくださり、二年に一回の展示会にも出展しています。

プロ級ですって？ うふふふ。

先生からは叱られながら、彫っていました。顔、特に眼が一番難しいです。集中してやらなければダメです。

手先が器用というよりも、コツコツやるのが好きでしたから、続いているんでしょうね。

今も七福神を彫っています。そう、大黒天、毘沙門天、恵比寿天……の七福神です。

四体彫りましたから、あと三体です。寿司屋の舟盛り用の船に乗っけようと、浅草まで船を見に行きましたが、ちよつと大きいので、どうしようかなと思っています。

若い人たちへのメッセージ

若い人たちに伝えたいことですか？

わたしもがまんがまんを重ねながらも、やりたいことをやってきた方だから、特にはないですね。

強いて言えば「やりたいことを一生懸命にやること」ですかね。

息子はお店を継いでよくやってくれているし、娘も、お嫁さんも、お婿さんも、孫娘たちも一生懸命にやっているからね。

だから、何も言うことはないね。

みんな一生懸命だからね。

ペラペラとしゃべりましたが、これで良かったのかしら？ えへへへ。

お話しできて楽しかったですよ。何を話したのかは忘れちゃったけど、出来上がった本を読むのが楽しみです。ありがとうございます。

（令和六年七月十一日・二十五日、八月十五日、九月五日 於ソラノイロ学芸大学）